

社会について考えを深め、自ら社会の形成に関わろうとする生徒の育成

(1年次/3年計画)

～「社会の分かり方」に着目して～

奥田 陽介 進藤 秀俊 米山 卓

1. はじめに

今、私たちが向き合っている世界は、想像を超える速さで変化している。AI技術やロボットの急速な発達、深刻な気候変動、紛争が頻発する危機的な国際情勢、そして急激な価値観の変容。こうした出来事が日常に入り込み、先の見えない不確実な時代が当たり前となっている。昨日までの「常識」が、今日には通用しないこともある。また、社会が複雑化する中で、人々の間にはさまざまな“分断”が生まれているのではないだろうか。情報の偏りや価値観の対立、経済格差や差別は、子どもたちの心にも知らず知らずのうちに影を落としている。そのような時代に生きる子どもたちに、私たちは何を学ばせ、どう育てていくべきなのだろうか。

一方で、私たちは多様な人々が共に生きる時代にも立っている。国籍や文化、性別、考え方が異なる人々が共に学び、働き、暮らす社会。その多様性は、時に不安や摩擦を生むものの、未来を切り拓くための大切な力となる。だからこそ、これからの教育には「知識の伝達」だけでなく、「違いを尊重し、共に生きる力」を育むことが強く求められると考える。他者対話し、異なる視点に目を向け、自分自身の考えを見つめ直す学び。そのような学びの積み重ねが、分断を乗り越えるための土台となる。正解が一つではない時代にあって、教育の使命は「すぐに使える答え」を教えることではない。むしろ、「問い続ける姿勢」を育てること、そして「社会にあって共に生き、共に考え続けようとする姿勢」を育むことにこそ、その本質があるのではないだろうか。

* 「はじめに」の作成にあたっては、構成や表現の整理のために、生成AI(ChatGPT)を一部活用した。最終的な内容の確認と編集は本校社会科教員で行った。

2. 研究主題設定の背景

(1) 令和4年度から令和6年度までの研究の経緯

① 研究主題の概要

本校では、平成29年度の学習指導要領の改訂に合わせて、「社会科を通して生徒に育むべき資質・能力」について研究を進めてきた。令和3年度までの5年間の研究の中で明らかになったことを踏まえ、令和4年度から令和6年度までの3年間の研究では、研究主題を「自らの社会の形成に関わろうとする生徒の育成～エージェンシーの育成に着目して～」と設定し、授業実践を通して研究を進めてきた。

エージェンシーとは、OECD Education2030プロジェクトから提唱された概念で、社会の一員として、よりよい社会を目指して「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」と定義される。「行為主体性」などと訳され、単なる主体性ではなく、アクティブな側面をいっそう強調したものである。(猪瀬、2022) 白井(2020)は、「エージェンシーには、社会の一員として、社会がより良くなるように考え、行動していくという責任があるということが含意されている。」と説明してる。また、「エージェンシーとは、単に個々人がやりたいことをやることではなく、むしろ、他者との相互のかかわり合いの中で、意思決定や行動を決めるものである。」とも述べている。また、エージェンシーは、様々な文脈において発揮されるものであるとして、リードビターの挙げた4つの文脈を引用しながら、その中でも注目すべきものとして「市民としてのエージェンシー」を挙げている。「市民としてのエージェンシー」とは、「単に市民として、自分たちの権利や責任について理解しているということだけではなく、それを前提にして、社会の構成員の一人として、どのように社会を担っていくか」ということである。OECDが提唱した経緯を踏まえれば、エージェンシーは本来学校の教育活動のすべて、または家庭、地域社会も含めたあらゆる場面における教育活動の中で育まれるものであると考えられる。「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の育成という視点、学習指導要領等で示されている「社会科という教科が目指しているもの」という視点から考えると、本校社会科としては、「市民としてのエージェンシー」のうち、「社会の形成者の一人として、社会をどのように見るこ

とができるのか、社会をよりよいものとするために何を変えるべきか、またそれはどうすれば可能になるのかを学び、考える」という側面に着目をして「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力をより明確にするとともに、その資質・能力を育成する場面において、どのような学習が有効か考えることとした。

「市民としてのエージェンシー」のうち、「社会の構成員の一人として、社会をどのように見ることができ
るのか、社会をよりよいものとするために何を変えるべきか、またそれはどうすれば可能になるのかを学び、
考える」という側面に着目をして、平成29年度の研究から本校で育成を目指してきた資質・能力、これまでの
研究の成果等を生かして、「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力の具体を次のように定義し
た。(表1)

表1 「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力

・社会に見られる課題を把握したり、よりよい社会の実現のために、新たな課題を見出したりして、それらの課題に関することについて多面的・多角的に考察して理解することができる。また、それらの課題の解決に向けて、諸資料から様々な情報を調べ、既知の事象と関連付けたり、まとめたりして、選択・判断することができる。 ・社会に見られる課題について吟味し、真に課題と捉えるべきものかどうか考え、判断することができる。また、よりよい社会の実現のために、自らの生きる社会について考察し、新たな課題を見出すことができる。 ・自らの考えを適切に表現したり、考察を深め、よりよい選択・判断をするために他者と積極的に議論したりすることができる。

「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力を学習の過程に沿って図示すると、図1 になる。

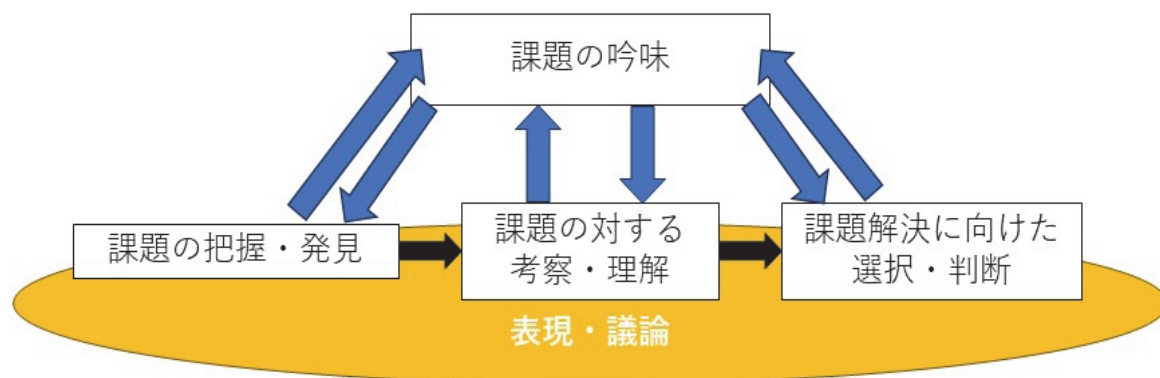


図1 「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力

② 具体的な研究の内容

1) 「主体的な学び」のプロセスモデルを生かした単元の構成

生徒が自らの学びを振り返り、調整するプロセスである『主体的な学び』のプロセスモデルを生かした単元を構成した。とくに「目標設定」、「方略計画」、「振り返り」、「全体の振り返り」を重視した。各学習過程においてどのような工夫を行ったかを次の表にまとめた。(表2)

表2 「主体的な学び」のプロセスモデルを生かした単元構成における指導の工夫

学習過程	具体的な工夫
目標設定	・生徒が自ら課題を見出せるよう、多様な資料を提示する。 ・見方・考え方を働かせることができるよう、視点や考え方についてアドバイスを行う。
方略計画	・単元を貫く問いを設定し、その解決のために必要な情報や思考をゴールとして設定させる。
振り返り	・毎時間、または数時間に1回、単元を貫く問いの解決にどれくらい近づくことができたのか、自ら設定した「ゴール」の達成状況などを振り返らせる。
全体の振り返り	・「単元の学習を通して努力し続けたこと」や「単元を貫く問いを解決するために工夫したこと」について振り返らせる。 ・自ら設定した「ゴール」の達成状況とともに、「ゴール」の妥当性について検証させる。

2) 現在の社会に見られる社会的事象を教材化

現在の社会に見られる社会的事象を教材化することで、「社会に見られる課題」や「よりよい社会の実現のために、新たな課題を見出すこと」への意識を高めることができると考えた。また、そうした教材を生かした学習を行うことで、中学校を卒業した後、実際に社会において生き、「社会の形成に関わろうとする」時に、より有効な資質・能力を育むことができると考えた。

地理的分野では地球的課題やSDGsなど、歴史的分野では歴史的事象を現在の社会でどのように扱うかなど、公民的分野では現代社会に見られる課題などを教材化することを想定した。

3) 学習方略の明確化と共有

「主体的な学び」のプロセスモデルにおける「学習方略」を生徒との対話の中で、明確にすることを目指した。また、明確にした「学習方略」をクラス単位で共有し、それぞれの「学習方略」を活用する目的や場面についても整理しようとした。

本校社会科では、「主体的な学び」のプロセスを「生徒が、社会的事象を自分事として捉え、切実感をもって学習する過程」と一致すると考えてきた。その学習過程において、生徒が自ら設定した「単元を貫く問い」の解決に向かって主体的に学習を進めるためには、生徒自らが「学習方略」を選び取って、試行錯誤しながら学習に取り組むことが必要になる。これは将来的には「社会的事象への向き合い方」になると考えた。生徒はこれまで社会科の学習、または他の教科の学習の中で、「学習方略」を無自覚に、または教師主導の授業展開の中で活用し、身につけてきたと考えた。それらを「生徒の言葉」で、「自分自身の学習方略」として明確にさせることで、生徒は自覚的に「学習方略」を活用できるようになり、これまで以上に主体的な学びが実現され、生徒のエージェンシーが高まると考えた。

これは、中学校卒業後の学びにもつながるもので、自ら学びを深める学習過程において、自分のもっている「学習方略」をさらに広げたり、質を高めたりして、新たな「学習方略」を見出し、よりよい学びを実現できるようになると考えた。

「学習方略」を明確にする過程では、生徒との対話を大切にした。なぜなら、「学習方略」を生徒の実感を伴うものとするため、「生徒の主体性」を大切にしたいと考えたからだ。また、生徒の発達段階（主に学年の違い）や学習集団（主にクラスの違い）などによって、生徒と共に明確化し、共有する「学習方略」の分類や内容、表現には違いがあり、3年間を通して身につけさせるものであるといえる。

「学習方略」を生徒の学びや気づきを生かしながら、生徒との対話の中で明確にするためには、教師の中で「主体的な学び」のプロセスモデルにおける「学習方略」を整理しておかなければならない。これまでの実践や共同研究者、研究協力員の助言を踏まえ、次のとおり「学習方略」の例を考えた。（表3）

表3 「主体的な学び」のプロセスにおける社会科の「学習方略」の例

学習を広げるための学習方略	学習を深めるための学習方略
・自分がこれまで学習してきたことを参照する。 ・教科書や資料集、用語集、地図帳等信頼性の高い資料を読む。 ・課題に関連のありそうな書籍を読む。 ・新聞を読む。 ・課題に関連のありそうなインターネットサイトを読む。 ・他者の学習の様子を参照する。 ・情報や自分の考えを図や表を使って整理する。 ・自分の意見を他者に伝える。 ・他者の意見を聞いたり、取り入れたりする。 ・他者と話し合い、意見を練り上げる。	・複数の視点に着目する。 ・複数の側面について説明する。 ・課題に関連のありそうなデータや写真、動画を集め、そこから情報を読み取ったり、読み取った情報を比較したりする。 ・自らの主張を、根拠付けるデータを探す。 ・課題に関連のありそうなデータを比べる。 ・地図で位置を確認したり、周囲に何が位置しているか見たりする。 ・時間軸で並べる。 ・現在の社会とのつながりを考える。 ・自分の生活や地域とのつながりを考える。 ・社会的なまとまりに着目したり、システムとして捉えてみたりする。 ・人々の価値観に着目する。 ・人々の交流や社会的事象のプロセスに着目する。

4) 自らの考えを表現する場面の重視

毎時間の授業や単元の学習の要所で、生徒が「自らの考えを表現する場面」を積極的・意図的に設定した。その中で、「表現」を生徒から引き出す方法についても実践を重ねた。

エージェンシーの概念から考えると、「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」とは何らかの形で社会との接続があるはずである。本校社会科では、生徒と社会をつなぐものは「自らの考えの表現」であると考えている。そのため、「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力として、「自らの考えを適切に表現したり、考察を深め、よりよい選択・判断をするために他者と積極的に議論したりすることができる。」を挙げている。何らかの形で「自らの考えの表現」がなされなければ、社会について考えることも、伝えることも、行動することもできないからだ。また、社会の一員として、社会に見られる課題、よりよい社会の実現のための新たな課題について考察したり、選択・判断したりすることも、自らの考えとして表現しようとする時に初めて整理され、明確化される。

③ 成果と課題

授業実践の中で見られる生徒の姿やワークシートなどの記述からは、「自分事」として社会的事象について考え、主体的に社会に見られる課題を把握したり、よりよい社会の実現のために、新たな課題を見出したりして、「単元を貫く問い」を設定し、その解決に向けて多面的・多角的に考察しようとしていることを見取ることができた。また、言葉や図、表などを使って、自らの考えをより適切に表現できるようになった生徒も多かった。

一方で、生徒の考察の内容に誤りがあったり、根拠となる事実が示さずに自らの考えを表現している生徒が多くいたりした。「学習方略」についても、広がりやに欠け、多面的・多角的な考察になっていない場合があった。社会に見られる課題について吟味し、真に課題と捉えるべきものかどうか考え、判断する場面については、その必要性を多くの生徒が感じていなかった。単元を貫く問いを一度立てると、その解決に向かって学ぶだけで、単元を貫く問いそのものがそもそも問うべきものなのかを振り返る場面は見られなかった。そのため、学びが浅いものにとどまってしまう場合があった。考察を深め、よりよい選択・判断をするために他者と積極的に議論をすることにも課題が残った。多くの生徒はその必要性を感じることができず、積極的に議論を求める姿はあまり見られなかった。また、多くの生徒が議論を行うスキルを身につけることができていなかった。

(2) 全体研究を踏まえて

全体研究では、本年度より研究主題を「自立した学習者の育成～学びを深める授業の創造～」と設定した。「自立した学習者」とは、「学びの場面において、自己選択・自己決定を繰り返し、課題の解決に自ら進んで向かう者」である。「自立した学習者」を育むために、「自己選択・自己決定」と「課題の解決に自ら進んで向かう」という点に着目して授業実践の深化を図る。具体的な研究内容は、「学びの『場』を整える工夫」を行う。

本校社会科の考える「自立した学習者」の姿とは、社会に見られる、またはよりよい社会の実現のために見出した課題に対して自分事として考察したり、選択・判断したりする場面や自分と社会との関わりについて考えたり、考えをまとめて表現したりする場面、社会認識を深める場面において、自ら学習課題を見出したり、学習方略を選択・決定したりする姿である。その姿を実現するために、「学びの『場』を整える工夫」として、これまで実践を積み重ねてきた「主体的な学び」のプロセスモデルを生かすとともに、生徒が「自分事」として考えてみたいと感じられるような社会的事象を提示したり、自分一人で考えをまとめるだけでなく、他者と協働して解決に向かうことで考えが深まるような学習課題を設定できるよう支援したりすることが必要であると考えた。

(3) 生徒の実態

令和7年6月下旬に、3学年421名を対象に、同一の質問をするアンケート調査を行った。前研究において課題として残ったことを踏まえ、次のような質問を行った。

Q1. 社会科の授業を通して、身につくことは何だと考えますか？（複数回答可）

- ・身近な問題を解決する方法
- ・社会の様子を知ること
- ・社会の仕組みを理解すること

- ・社会の仕組みの価値を理解すること
- ・社会に見られる課題を把握する方法
- ・社会に見られる課題を解決する方法
- ・私たちが生きている社会を分かる方法
- ・社会との関わり方

Q 2. 地理の授業で、学習課題の解決に向かうとき、もっとも有効な手段は何だと考えますか？

- ・先生の説明を聞くこと
- ・クラスメイトと一緒に調べたり、考えたりすること
- ・一人で調べたり、考えたりすること

Q 3. 歴史の授業で、学習課題の解決に向かうとき、もっとも有効な手段は何だと考えますか？

- ・先生の説明を聞くこと
- ・クラスメイトと一緒に調べたり、考えたりすること
- ・一人で調べたり、考えたりすること

Q 4. 公民の授業で、学習課題の解決に向かうとき、もっとも有効な手段は何だと考えますか？

- ・先生の説明を聞くこと
- ・クラスメイトと一緒に調べたり、考えたりすること
- ・一人で調べたり、考えたりすること

Q 5. 「自分なりの意見」をよりよくするために、「必ず」または「よく」行うことはありますか？

- ・クラスメイトに意見を聞く
- ・先生に意見を聞く
- ・過去に学習したことと照らし合わせる
- ・根拠になりそうなデータを、インターネットで新たに調べる
- ・根拠になりそうなデータを、教科書や資料集など学校の教材を使って新たに調べる
- ・根拠になりそうなデータを、図書室の本など書籍を使って新たに調べる
- ・何もしない

Q 6. 社会について調べる場合、よく活用する情報源は何ですか？

- ・インターネット
- ・新聞
- ・教科書や資料集などの学校の教材
- ・図書室の本などの書籍
- ・テレビやラジオ
- ・家族や友だちの意見、そこから得られた情報

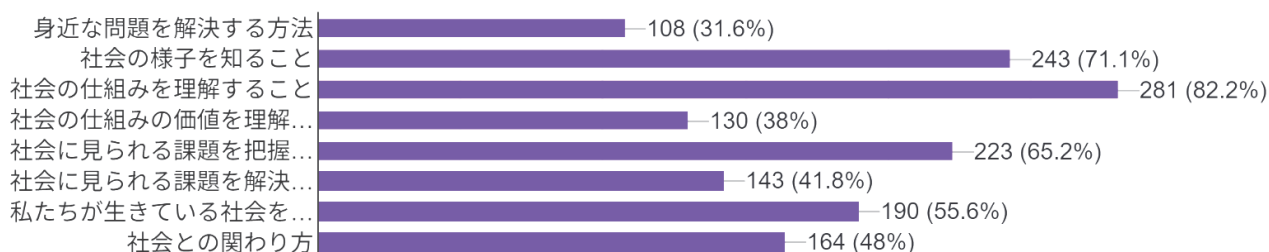
Q 7. Q 6 の答えを選択した理由

Q 8. インターネットで情報を集めるときに、情報の正しさをどのように確認していますか？

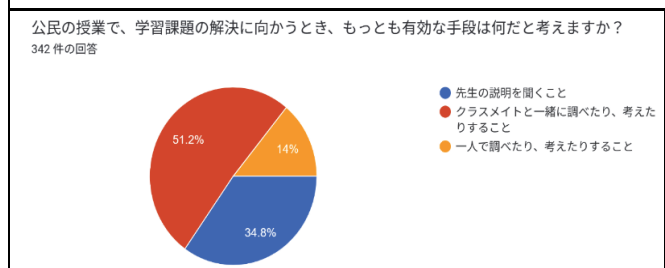
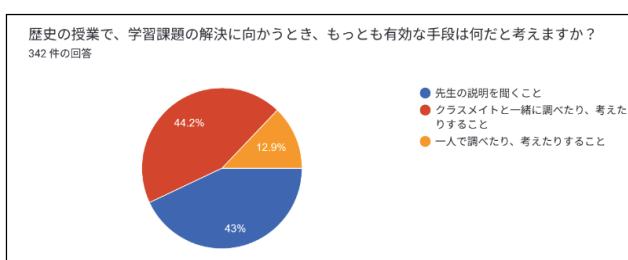
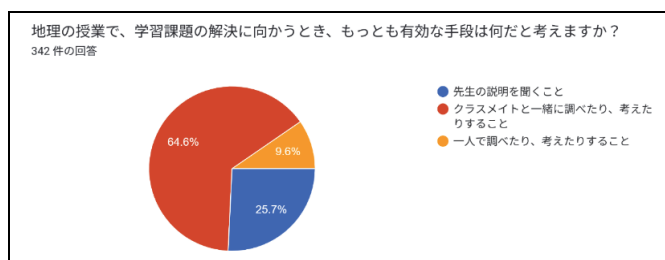
アンケート調査の結果は次のとおりである。

社会科の授業を通して、身につくことは何だと考えますか？（複数回答可）

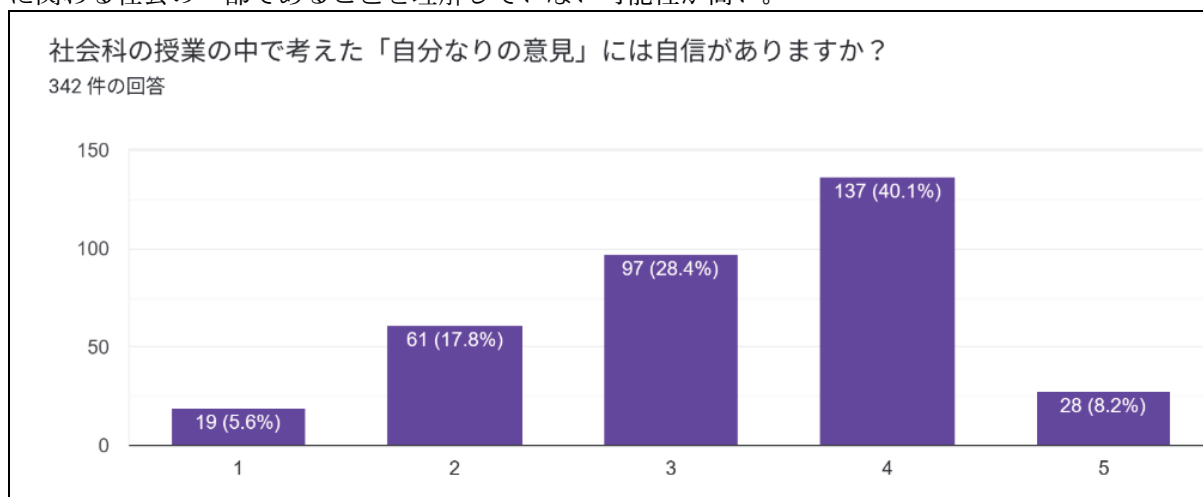
342 件の回答



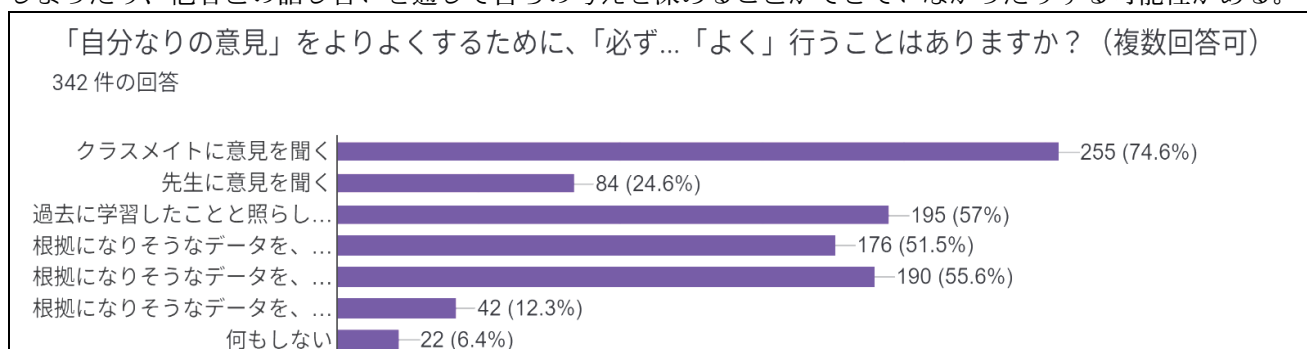
この質問について多かった回答は「社会の仕組みを理解すること」「社会の様子を知ること」である。生徒たちにとって、社会科の授業において扱う「社会」とはその姿を理解する対象であり、それは仕組みをもったもの、つまりシステムであるという認識があることが分かる。一方で、少なかった回答は「身近な問題を解決する方法」「社会の仕組みの価値を理解すること」である。複数の生徒を抽出し、「回答する際、社会の仕組みの価値とは何を示していると考えたか」聞いたところ、すべての生徒が「社会の仕組みを創り出した人々が大切にしていたこと、その人々がもつ考え方」という内容の回答を行った。そのことから、多くの生徒が社会の様子や仕組みを理解しても、その根底にある考え方や価値観などについて考えられていないことが分かる。



生徒たちが上記のように回答した理由として挙げていることは、「地理や公民は、現在進行形の問題で、多くの意見を聞いた方が良い」「歴史は、過去の出来事で確定したものであるため、先生のまとめた話を聞いた方がよい」ということであった。生徒たちの中で、歴史もつくられた社会像であることへの認識薄く、自ら形成に関わる社会の一部であることを理解していない可能性が高い。



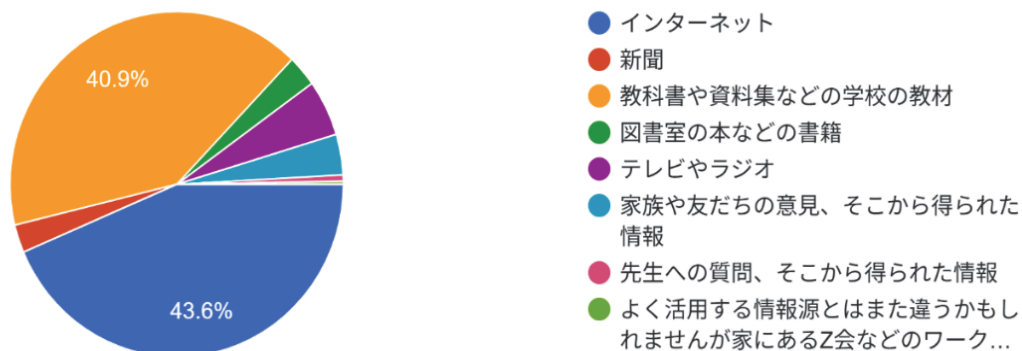
「3」以下の生徒が半数を占めている。自らの考えに自信をもてずに、他者との意見交流に消極的になってしまったり、他者との話し合いを通して自らの考えを深めることができていなかったりする可能性がある。



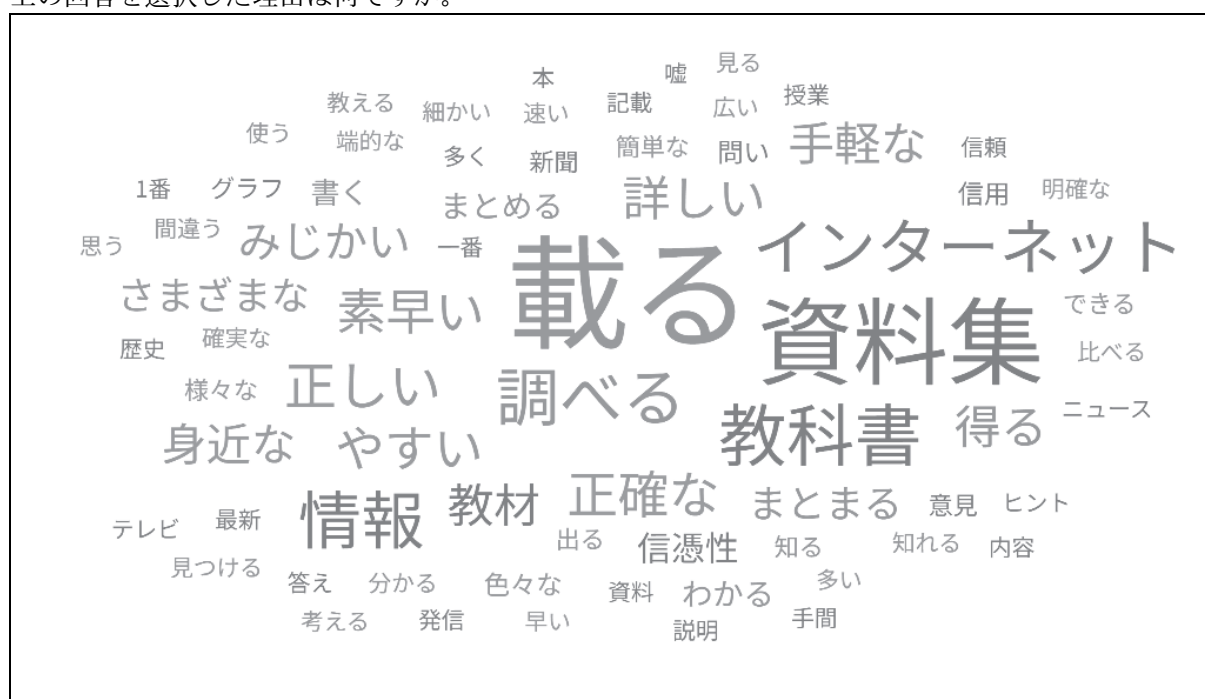
多かった回答は「クラスメイトに意見を聞く」である。これは取り組みやすさも影響しているかもしれないが、前研究までの取り組みの効果であると考えられる。複数の生徒を抽出し、「根拠になりそうなデータを得た場合に、その信頼性について確認するために、さらにデータを探すかどうか」を質問したところ、ほぼすべての生徒が「探していない」または「信頼性を確認するためどうすればよく分からない」と回答した。このことから、根拠になりそうなデータを何らかの方法で得ようと姿勢は多くの生徒に見られるが、データが信頼性のあるものかどうか、その読み取り方が正しいかどうかを確認するスキルについては不十分である可能性がある。

社会について調べる場合、よく活用する情報源は何ですか。

342 件の回答



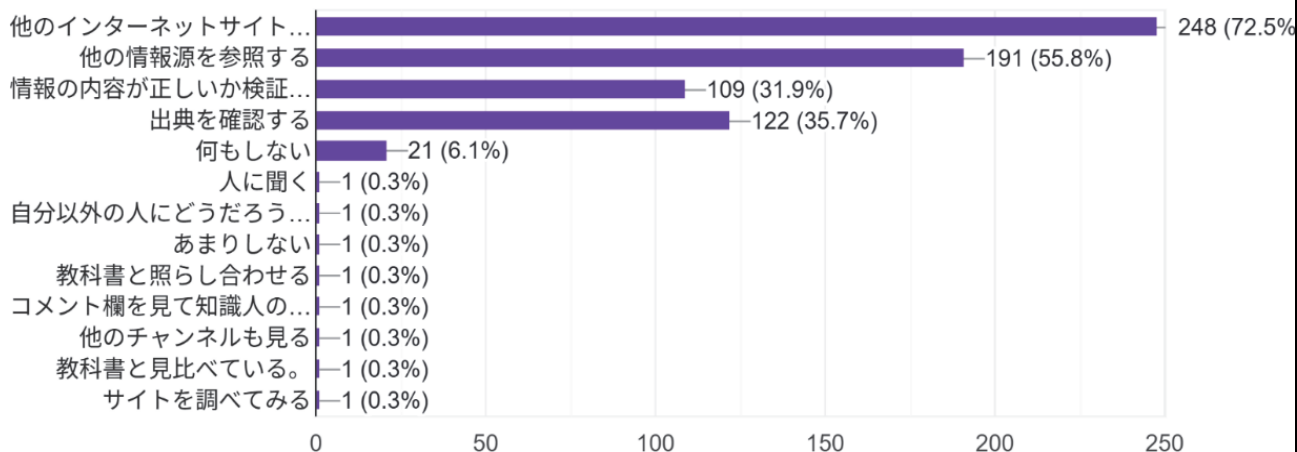
Q. 上の回答を選択した理由は何ですか。



※A I テキストマイニングで分析したもの。スコアが高い単語が選ばれ、その値に応じた大きさと色で図示される。

インターネットで情報を集めるときに、情報の正しさをどのように確認していますか？

342 件の回答



インターネットを活用する生徒が多い。その理由として挙げられるのが、「手軽さ」「素早さ」「身近さ」である。同時に多く活用されているのが、「教科書や資料集などの学校の教材」である。その理由として挙げられるのが「正しさ」「必要な情報がまとまっていること」「身近さ」である。これまでの生徒の考えを見ると、正確ではない情報をもとにしていたり、データから読み取ったことや情報を組み合わせて見出したことが誤っていたりすることが多々あったので、手軽さや素早さ、身近さ、絶対的な正しさがあるとの思い込みなどから、情報の正しさの確認が曖昧であったり、データの読み取り方やデータから読み取った情報を生かす方法が間違っていたりした可能性がある。

3. 研究主題について

(1) 研究の背景を踏まえて

前研究では、「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力について、市民的資質にあたる「社会に見られる、またはよりよい社会の実現のために見出した課題に対して自分事として考察したり、選択・判断したりする」、「自分と社会との関わりについて考えたり、考えをまとめて表現したりする」側面を育むことは一定程度できたと言える。同時に、「社会認識形成を通して市民的資質を育成する」という社会科教育の基本原則から考えると、「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力のうち、社会認識形成にあたる側面、つまり生徒の「社会の分かり方」の深化に一層力を入れる必要性があると考えられる。

前研究に取り組んだ3年間と現在の世界や日本の姿、生徒たちが生きる社会の姿、そこから考える生徒に育むべきだと考える資質・能力を比べたとき、そこには大きな変化はない。そこで、本研究においても、前研究を引き継ぎ、「自らの社会の形成に関わろうとする生徒」を育成するための手立てについて研究を深めたいと考えた。

ただし、「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力のうち、「社会の分かり方」の深化に一層力を入れる観点から、研究主題を「社会について考えを深め、自ら社会の形成に関わろうとする生徒の育成」とする。

(2) 「社会について考えを深め」るとは

「社会について考えを深め」とは、生徒自らが複数の情報をもとにしたり、根拠を明確にしたりして、論理的に考察や選択・判断を行い、社会認識を深めることである。これは、社会に見られる課題を把握したり、よりよい社会の実現のために新たな課題を見出したりする上で必要不可欠なことである。また、社会に見られる課題について、真に課題と捉えるべきものかどうか吟味し、判断する際にも重要な要素となる。

生徒が自ら社会認識を深める過程で、自らの考えを周囲の人に伝わるように表現しようとすることや他者と積極的に議論して、より多面的・多角的な考察や選択・判断に近づこうとすることは、有効な手立てとなる。また、生徒が「社会について考えを深め」るための授業の工夫を行うことで、生徒の考えや話し合いの質が高まり、生徒の表現力もそれに伴い、さらに向上すると考えられる。

(3) 「社会の分かり方」について

本校社会科で考える「社会」とは、制度としての「社会」という側面とより良いあり方を目指して市民によって形成される「社会」という側面の両面をもったものである。また、「社会の分かり方」とは社会認識の枠組みである。これについて、『社会科教育事典 第3版』（日本社会科教育学会、2024）では次のように説明している。

社会認識を知識、概念、価値の3層でとらえる考え方がある。知識は個別的記述的知識であり、個別事象記述した命題であり、「～は～である」という形をとることが多い。概念は概念的説明的知識であり、原因・結果の関係や条件・予測の関係など、事象相互の関係性を説明する命題であり、「～だから～である」「～ならば～である」という形をとることが多い。事実認識は知識と概念の両方を獲得してはじめて可能になる。最後の価値は価値的知識のことであり、価値判断を伴った命題であり、「～は～すべきである」「～は～すると良い」などの人間の行動規範の形をとることが多い。社会認識とは「社会がわかること」である。「社会がわかる」とは「社会に存在する事実がわかること」の事実認識と「社会に存在する価値がわかること」の価値認識の両方を意味する。

本研究においては、上記の考え方を踏まえ、これまで本校が積み重ねてきた研究の成果を生かして、「社会の分かり方」を定義したい。本校社会科の考える「社会の分かり方」をまとめると、次の表のとおりとなる。（表5）

表5 本校社会科の考える「社会の分かり方」

○社会をシステムとして捉え、社会的事象の関係性に着目して社会を認識する。
○システムとしての社会の根底には価値観があると捉え、その価値観に着目して社会を認識する。

生徒が社会を認識する際の枠組みである「社会の分かり方」は未完成であり、また社会は常に変化するものであるから、生徒は常に自らの「社会の分かり方」を深化させる必要がある。

（4）「社会について考えを深め、自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力

生徒の実態や前研究の成果と課題を踏まえ、これまで本校で考えてきた「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力を基礎として、社会認識形成の側面に関わる資質・能力、すなわち「社会の分かり方」をより明確化し、次の表のとおり整理した。（表4）

表4 「社会について考えを深め、自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力

・社会に見られる課題を把握したり、よりよい社会の実現のために新たな課題を見出したりして、それらの課題に関することについて、<u>根拠を明確にして、論理的に考察することで、より多面的・多角的に理解することができる。</u>また、それらの課題の解決に向けて、諸資料から様々な情報を読み取り、<u>論理的に</u>既知の事象と関連付けたり、まとめたりして、選択・判断することができる。 ・社会に見られる課題について吟味し、真に課題と捉えるべきものかどうか考え、判断することができる。<u>また、自らの「社会の分かり方」を吟味し、深めることができる。</u> ・自らの考えを適切に表現したり、考察を深め、よりよい選択・判断をするために他者と積極的に議論したりすることができる。
--

※下線部は、前研究における定義から加筆した箇所。

4. 研究の内容

1年次は、生徒の「社会の分かり方」を深化させる工夫について、授業実践を通して探究したい。また、生徒の実態を踏まえ、社会的事象について事実に基づいて論理的に考察したり、構想したりすることができるようにするための工夫を行いたい。これらは、前研究の課題として残った「学習方略」の質を高めることにつながるものである。具体的には、生徒の発達段階に応じて、次の2点について手立てを考えたい。なお、それぞれの手立てを実践するにあたっては、生徒の実感、生徒自身が学びに主体的に取り組む姿勢を大切にする観点から、生徒と対話を重ねる中で、どのような学び方が良いのか考えを深めさせるという方法を採用したい。

（1）「社会の分かり方」を深化させるための手立て

社会的事象の関係性について説明させるだけでなく、その関係性の背景にある価値観について考えさせる学習課題を設定する。その際は、生徒自らが学習課題を設定したり、いくつかの選択肢から選んで学習課題を設定したりできるよう工夫したい。学習課題を追究させる際には、生徒が話し合いを通して考えが深められるよう、話し合いの具体的な視点や、質問や意見を考える際のポイントについて具体的に指導したい。

（2）事実に基づいて論理的に考察させたり、構想させたりするための手立て

教科書や資料集から得られる資料、インターネットサイトに見られる資料などについて、どこに着目すべきか、どのような情報を得ることができるのか、その方法を生徒に身につけさせるための工夫について考えたい。具体的には、資料の着目ポイントとそこから読み取った情報（＝事実）を明確にしてまとめるワークシートを活用し、生徒の学びの中で習慣化させたい。

また、自らの得た情報の信頼度を吟味し、情報を取捨選択できる能力を身につけさせるために、得た情報をまとめたり、それらの情報の信頼度をランク付けで示したりする活動を定期的に仕組みたい。その際は、『その情報、本当ですか？』（塚田、2018年）で、「正しい情報をどう選り分けるか、身につけてほしい3か条」として挙げられている「情報源は何かを確認しよう」、「必ず複数の項目をチェックして、自分とは違う考え方を聞こう」、「自分のスケール（尺度）を作ろう」を参考としたい。

さらに、集めた情報をもとに論理的に考察させたり、構想させたりするために、議論を分析・構成するためのフレームワークである「トゥールミンモデル」の考え方を活用したい。具体的には、生徒に説明させたり、自らの考えをまとめさせたりする場面において、根拠となる情報やその情報と自らの考えを結びつける「つなげる考え」を明確にすることを指導したり、その思考の過程を可視化できるワークシートを活用させたりしたい。

5. 研究の計画

1 年次 (本年度)	・「社会について考えを深め、自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力のうち、とくに社会認識形成の側面に着目をして、「社会の分かり方」や「社会の分かり方を吟味する方法」を身につけさせるための手立てについて、授業実践を通して明らかにする。
2 年次	・「社会について考えを深め、自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力を、生徒自身が学習を通して高めるための手立てについて、授業実践を通して明らかにする。
3 年次	・1、2 年次の研究成果を整理し、「社会について考えを深め、自ら社会の形成に関わろうとする生徒」を育むための授業のあり方についてまとめる。

6. 引用・参考文献

- ・文部科学省『学習指導要領総則 解説』東山書房、2018年
- ・文部科学省『学習指導要領社会 解説』東洋館出版、2018年
- ・澤井洋介・唐木清志編著『小中社会科の授業づくり』東洋館出版社、2021年
- ・渡部竜也・井手口泰典『社会科授業づくりの理論と方法』明治図書出版、2020年
- ・白井俊『OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー、資質・能力とカリキュラム—』ミネルヴァ書房、2020年
- ・猪瀬武則「中間報告書『経済的見方・考え方を働かせた心温かいエージェンシーの育成をはかる経済教育内容開発』」日本体育大学、2022年
- ・唐木清志『「公民的資質」とは何か—社会科の過去・現在・未来を探る—』東洋館出版社、2016年
- ・木村明憲『自己調整学習 主体的な学習者を育む方法と実践』明治図書、2023年
- ・日本社会科教育学会『社会科教育事典 第3版』ぎょうせい、2024年
- ・文部科学省「教育課程企画特別部会論点資料⑥ 情報活用能力の抜本的向上」文部科学省、2025年
- ・塚田祐之『その情報、本当ですか？—ネット時代のニュースの読み解き方』岩波書店、2018年